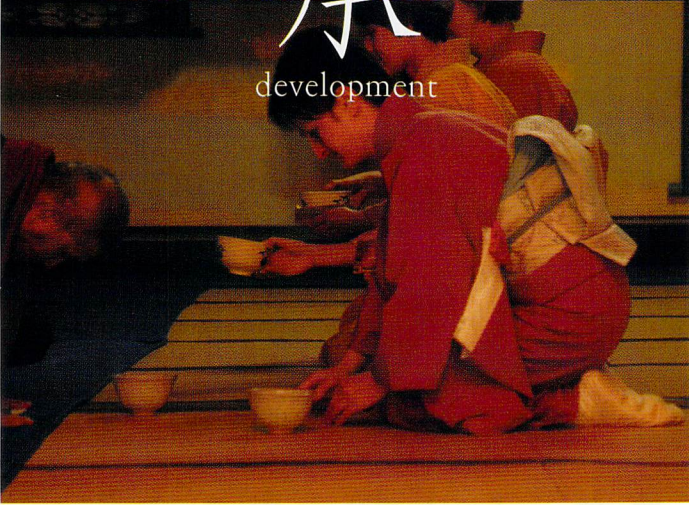


その法堂内では相國寺派管長 有馬現下による法話と、同寺の塔頭・養源院の住職にして、銀閣寺の執事、さらに音楽家としても名高い平塚景堂師が作曲したヴァイオリン・ヴィオラ・チェロとピアノによる室内四重奏が行われた



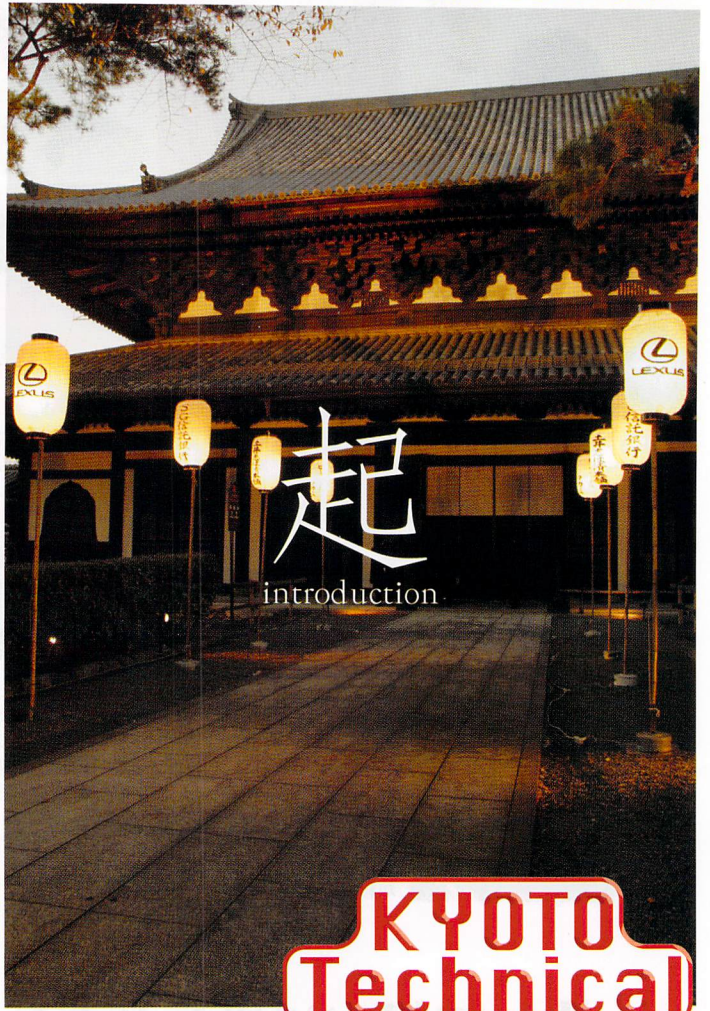
承

development



茶席は裏千家の全面協力により、海外からの留学生がアテンド。お茶菓子は当日のために、これも協力者である俵屋吉富の謹製が振る舞われた

荘厳なり、常であれば撮影すらなかなか許可されない大本山 相國寺法堂（はつとう）。催しは「起」「承」「転」「結」の進行に則って進められ、法堂前では迎いの茶席が用意されたが、「起」は、この威風堂々たる外観を目にすることだったかもしれない



起

introduction

KYOTO Technical Site

取材・文/竹中 聡 (編集部)
撮影/中島光行

「普通、無理でしよう…」

その不可能を可能にする力

「遊ぼう」という誘い

以来、1200年のあの年に。

全国的に言えば、平安遷都。京都を中心に言えば、平安建都。それが94年だった。この記念の年に、当地京都では「平安建都1200年記念協会」なる財団法人が組織され、様々なイベントや催しが企画された。前夜祭として6月5日に平安神宮で行われた藤井フミヤのライブなどは、かなりの評判になったものだ。

今回ご紹介する「につぼんと遊ぼう」というイベントも、同年に第一回が開催されていた。内容は茂山千作、茂山千之丞らを招いた観劇であった。

マネージメントしたのは、先の協会内に事務局を構える「京都若衆会」という有志団体。京都に本拠を置く企業の経営者を中心に組織された会で、次代を担う当時40代半ばの働き盛りの世代が「京都に盛大な祭を」と、仕事を越えて語り合い、そして尽力した。その中に、全国にその名を知られる「ブライダル産業界の雄」、「TAKAMI（高見株式会社）」の高見重光社長の名前がある。

つづけること。やめないこと。

この年に企画されたイベントの中には、単

発のものも多かったが、05年、同イベントはめでたく12回目を迎えている。「自分たちが生まれ育った京都を知ってもらおう」という意図のもと、京都の名刹を舞台に、初年度は二尊院、二年目は法然院、三年目は高台寺…、会場と内容を変えて継続している。四回目にあたる97年には、永観堂で片岡孝夫（当時。現・片岡仁左衛門）・片岡孝太郎の歌舞伎役者親子が舞を披露し、翌98年には、嵯峨大覚寺でカウンターテナーのスラヴァが「アヴェマリア」ただ一曲を唄うために来日した。現在は「京都若衆会」から引き継ぎ、「TAKAMI」の単社開催と言っても良い。だがオーガナイザーの数と反比例して、同イベントの規模は拡がりを見せている。名前だけを継承した、資金集めのイベントとは、訳も格も違う。そもそも、同イベントの呼びかけは、当時から同社が行っていたフシがある。「ブライダルビジネスというものが、もともと『満足だけでなく感動を与えるもの』である」というのが当社の考えで、同イベントに関しては、代理店などに依頼せず、全て当社の社員が運営しています。同社広報企画部の小山さんは言う。「社員が運営すること」は社長としてはこの上ないエクササイズだと思っ

ているようです」とも。まあこれは開催す



「結」に用意されたのは、方丈南庭で行われた高安マリ子の舞踏と松田美緒の歌唱。麗らかなラテンのリズム。テンションコードを導くギター。飛び跳ねるように石畳を歩き来しながら唄う松田美緒の姿に見惚れたか、それまでの豪雨がピタリとやんだ奇跡



方丈と方丈の北庭では、「竹のオブジェと竹筒の灯のインスタレーション」が行われた。BGMは尺八奏者数名によるライブ。オペレーション上はたいへんだったかもしれないが、尺八の音色と幽玄な雨の方丈も実に美しいものだった

る側の舞台裏であるし、目に見て解りやすい企業メセナに躍起になるご時世でもない。本旨は開催内容にある。

相國寺？ 普通、無理でしょ…

05年は会場を京都市上京区は大本山 相國寺に借り、法堂前では裏千家による茶席や、同寺の有馬頼底管長による法話、さらに同寺内塔頭・養源院の平塚景堂住職と弦楽奏者による室内四重奏が、方丈北庭では竹のインスタレーションと尺八の演奏、方丈南庭ではダンスセラピストとして活躍する高安マリ子による舞踏、加々美淳のギターと新進気鋭のシンガー・松田美緒のライブなどが行われている。さらに苑遊会場では、初めてチャリテイクションが開催された。

同寺に詳しいフォトグラファーは言った。「そもそも、相國寺でイベントって、普通、無理でしょう…」と。営利目的では、まずその舞台が実現不可能であろう。これは過去の会場となった京都の名刹の数々も同じこと。

「上手くまとめることよりも、参加者が喜ぶことを考える。このイベントが（一生に一度の大イベントである）プライダルだったらどう思う？ まだ足りない、まだまだ足りない」。高見社長は言う。「社長の頭の中には既に来年のプランがあって、『こんな内容で〜』という具体的なところまで（笑 小山さん）」。第一回目から、干支を一回りした。それでもやり慣れるということはないのだが、思いは自然と次へ次へと進んでいく。

根性論では続きません。

今世紀に入ってから、[和洋の文化・芸術の繋ぎ役]という性格が強くなっている。01年には「DURAN DURAN」のヴォーカリスト、サイモン・ル・ボンを演者として招いた。今年も映画「シルミド」の主演俳優ソル・ギョングをはじめ、来場者として海外か

らのプライベート来日が目立った。

「にっぽんと遊ぼう」。イベント名を考えれば、海外から期待以上の来場も理解できるが、本来の主旨を考えれば、ルーツを忘れてちな我々こそが訪れるべきとも思う。その為に、「もつと若い方々にもお越しいただきたい」という思いもあるという。「若輩者」ではない、これから担っていくという意味の「若い世代」へのアプローチにしたい、と。現に今回のクレジットを見ても「芸術監督■木村英輝」「プロデューサー■四方義朗」らの名前と並んで「衣裳■若林剛之」の名があった。本誌でもおなじみの「gon・son」の代表である。シンガーに20代の松田美緒を起用したのもそのひとつだ。ただ、実際のところは少々ハイブローな世界であることも否めない。チャリテイクションの発展も、ちょっと軽々しく口にするものでもない。「プレスパス」という免許符を与えられた本誌や同業者は幸運な類と言えるだろう。

予定の参加人員を越える盛況であっても、回数が12回を数えても、会場によって毎回演出やしつらえも変わる。と、同時に湧き出る思いもまた、新たなものがある。

呼びかけの声は「遊ぼう」である。つまり、相応の歴史を持つ建造物のみが持つ、緊張感のようなものが心地よいと思えることが貴いのだ。より豊潤な遊びを求めて同イベントは続いているのではないか。

「これからも続けていきます。確かに営利目的ではありませんが、お金も人も、根性論では続きません（小山さん）。営利でも根性でもなければ、それは何か？「普通は、無理」。ならばその不可能が可能にするのはトリックか？ 否。

その答えは、「遊ぶ」というシンプルにして深遠な言葉に、あるのかもしれない。